

池窪弘務作品集 6 一九九九年（五十三歳）
窓（ラジオドラマ）

1999-11-13 (FMシアター)

登場人物

渡辺 孝（47）

渡辺 久美子（39）

渡辺 麻衣子（9）

渡辺 孝（子供）（10）

父

母（72）

兄（52）

姉（50）

片山（35）

女子社員（25）

男子社員（35）

女

藤波（10）

寺本（11）

市川（43）

和田（43）

駄菓子屋のおばさん（70）

飲み屋の店員（20）

ガソリンスタンドの店員（20）

クリニックから来た女（35）

クリニックから来た男（50）

渡辺（語り）「夜の闇を背景に窓は鏡になった。窓

の外の私が部屋の私の目にいる。誰か。よく

似た目だと思っただ。直ぐに父の目だ。気がついた。

一重瞼で奥行かない目だ。父の目の形を知った。

は何時の事だったろうか？ 一緒に住んでいた頃

は似ているとは思いつけなかつた。肉親は、他人の度合いが深まるにつれ、顔の部分が似てくるのかも。少し窓の外は、私の背広と、ネクタイを少しゆるめて、立ち飲みのカウンターに肘をついて、私の方を見て、ヨオという風に人差し指と中指を立てて、サインを送ってきた」

タイトル「窓」

駅の雑踏

渡辺（語り）「駅はコンクリートと鉄で出来た通路。高校を卒業して29年間、何時も決まった時間、私は、その一本の通路を歩く。明日から続く13年近い日々も、次第に衰えていく肉体を携えて、同じような風景の中を足早に横切っていくのだろう。生きてさえすれば、定年までの行程にそれほど誤差が生じるとは思えない」

渡辺（語り）「高校を卒業して29年間電気メーカーに勤めている。取り立てて会社にも、家族にも不満はない。ただ、47才になった今、とらえどころのない不安が胸をよぎることがある。それはすぐに日々の生活に薄められ、消えてしまうのだ。……」

車の音が入る。

渡辺（語り）「桜の季節がやってきた。今年の桜は、薄い紅を引いたように霞んで見える。いつだったか、こんな色の桜をみたことがある」

○会社への道

車の音。後ろから早足で近づいてくる足音。

女子社員「渡辺さん、おはようございます」

渡辺「おはよう」

男性社員「おはようございます」

渡辺「おう」

男子社員「咲いてきましたねえ、桜」

女子社員「春ですねえ。お花見を企画しないと」

男子社員「今度の日曜日あたりまでだろうね」

女子社員「それじゃ明後日にします」

男子社員「場所取りは任せて。奈々ちゃんはカラオケセットよろしく」

並んで歩く足音。突然立ち止まる。

女子社員「どうされたんですか？」

渡辺「いや、ちよつと用事を思い出して」

女子社員「用事……」

渡辺「（遠ざかる）今日は休むって言うておいてよ」

男子社員「どうしたんだろ」

○電車の中

電車の中

渡辺（語り）「空気を運んでいるような車内。優先

座席に深く腰掛ける。都会から出て行く人が、ぼ

ったり、ぼったりと腰掛けている。（ドアの閉まる

音）一斉に吊革が揺れ始めた」

電車のすれ違う音。

渡辺（語り）「すし詰め通勤電車とすれ違う。目

を閉じると、見えない賽が振られたような、胸騒

ぎに似た不安が心の底に広がる。水曜日の取り立

てて変わったこともない朝に」

○玄関

呼び鈴を押す。ドアを開ける音。

久美子「はあーい。どなたですか」
渡辺「俺だよ」

鍵を開ける音。

久美子「あなた……。びっくりした。どうしたの」

渡辺「今日は家にいるよ」

久美子「風邪……。熱があるの。おでこ出して」

渡辺「いいよ、子供じゃあるまいし」

○居間

居間にはいる

渡辺「ビール」

久美子「めずらしい。登校拒否、いや、登社拒否かな」

テレビをつける音。ワイドショーの音。ビールを食卓に置く音。

久美子「スーパーに行くところだったの。行っても

いい」

渡辺「ああ」

ビールを飲む音。

久美子「一緒に行く？」

渡辺「行かない」

久美子「おつまみないんだけど。急に帰って来るんだから」

渡辺「麻衣子は？」

久美子「学校よ。誰かさんとちがって」

テレビを消す。

久美子「冗談、怒ったの。ごめんなさい。それより、お花見、行かない。川沿いの桜が満開よ」

立ち上がる音。

久美子「どうしたの」

渡辺「書斎にいるよ」

久美子「えっ？」

○書斎

書斎のドアを開ける音。

渡辺（語り）「書斎は四畳ほどの広さで、窓が大きくとつてある。東西に細長い書斎の東向きに横一間弱、縦半間ぐらの窓がある。これは曇り硝子で外は見えない。北向きの出窓は、東向きの窓より一回り大きい。北側は半分以上窓だ。その窓と歩道の間は一尺ぐらいいしかない。歩道の向こうは車道で、その向こうにフェンスがあつて、川が部屋と平行して流れている。川の向こうはたんぼ。つまり飽きの景色だけれども、見はらしはい。その窓もカーテンを引いている」

ドアの外から

久美子「行つて来るね。何か欲しいものある」
渡辺「別にないよ」

カーテンを引く音。

渡辺（語り）「カーテンを開けると、一斉に光が流れ込んでくる。部屋が外の世界と結ばれる。様々な人が窓を横切つて行く。不思議に車の音は気にならない。意識すれば時々聞こえるが、ぼうつと見ているぶんには、窓は音のない世界である。突然、窓の下側を黒い頭が通つたりして、驚く。まるで窓などないように彼らは通りすぎていく。窓

は私と外を隔てると同時に、私と外を繋いでいる。驚がゆっくりと窓に現れ、空気に身を任せ、田んぼに消えた」

○居間

居間。

麻衣子「ただいま」

久美子「お帰り」

麻衣子「あれ、お父さん、今日はお休み？」

渡辺「ああ」

久美子「まいちゃん、驚いたでしょ。お父さんがいるんだもんね」

ビールを飲む音。

久美子「私も一杯もらおうかなあ」

ビールをつぐ音。

麻衣子「（少し離れて）お母さん、今日、塾でね分数習ったよ」

久美子「そう、分数は難しいでしょう。この前のテストはどうだったの」

麻衣子「ハチバン」

久美子「三つも上がったじゃない。よく頑張ったわね」

渡辺「塾に行っているのか？ まだ、小学校三年生だろう」

久美子「みんな行ってるわ。遅いぐらいよ。それに、塾のことはあなたに相談もしたでしょう。麻衣子、やっとな、十番以内になったのよ」

書斎のドアを開ける音。

久美子「（遠くから）あなた、もっと、マイとお話してよ」

○書斎

渡辺（語り）「部屋に戻ると、何時の間にか日は落ちていた。窓の向こうにもう一つの私の部屋が現れていた。窓の外の私が私を見ている。夜の闇を背景に窓は鏡になった。怠けと窓の外への恐れが、私を飲み込んでいる。目を凝らすと、時計の針が逆だ。右手を上げれば、窓の外は左手を上げる。確かに、私は今まで、窓の外の世界で生きていたのだ。私とそっくりなのに、逆さまの私として。深夜白い鳥が窓をよぎった。こんな遅く、鳥が飛ぶとは。知らなかった」

○居間（日替わり）・会社への電話

掃除機の音。消えて、電話をプッシュする音。

久美子「営業の片山さんお願いします」

片山「はい、片山です」

久美子「渡辺ですが。今日もう一日休ませてもらいたいと」

片山「分かりました。体の調子でも」

久美子「いいえ、ちよつと、用事がありました」

片山「そうですか」

久美子「片山さん」

片山「えっ」

久美子「仕事の方で何か変わったことでも」

片山「いいえ、営業部は順風満帆ですよ、それとも何か」

久美子「（慌てて）

いいえ、ちよつと気になっただけです」

片山「今月からの、新しいプロジェクトのことで、

先輩もやる気満々ですよ」

久美子「そうですか、また、家の方にも遊びに来て下さい」

片山「ありがとうございます」

電話を置く音。玄関の戸を開ける音。

麻衣子「行って来ます」

久美子「忘れ物ないね」

麻衣子「はあーい」

戸を閉める音。

○書齋

渡辺「窓の下を小さな身体がよぎって行く。あんなに大きなランドセルを背負っているとは今まで知らなかった」

書齋のドアが開く。

久美子「会社に電話しました」

渡辺「ありがとう」

久美子「どうしたの、あなた」

渡辺「休憩だよ。三十年近くも働いてきたから」

久美子「それならそれで、きつちりと休みを取って」

渡辺「……」

久美子「ね」

渡辺「明日は行くよ」

久美子「ほんと」

渡辺「ああ」

書齋のドアを閉める。

渡辺（語り）「一日、窓から、空を見ていれば、時の流れがよく分かる。ああ、このように一日が過ぎていくのかと納得する。空は絶えず流れている。光と雲、それらが遊ぶ球形の天空は流れるように変化する。一日も、一年も、一生もこのように過ぎていくのだろうか」

○書齋・窓・父

7 渡辺（語り）「夜、窓に、6年前に亡くなった父が来た」

電車が高架を通る音。

渡辺（語り）「ガード下の立ちのみの店で、カウンタ―に片手を置いて、ビールの中瓶を手酌で飲んでる」

渡辺「父さん」

父「おう、お前か」

渡辺（語り）「窓の外と中が溶け合う。次の瞬間、

私は父のそばにいた」

渡辺「隣、いい」

父「ああ」

渡辺（語り）「父と二人きりで話した記憶がない。いつも誰かいた。母か、兄か、姉か。父は黙々と親の義務をはたしているような気がした」

電車が通る音。酒場の喧噪。

父「お前も、こんな処で飲む歳になったか。母さん元気か」

渡辺「元気だよ。まだ、まだ、父さんところには行けないってさ」

父「いくつだっけ」

渡辺「七十二」

父「もう、俺の死んだ歳を越えたか……。お前いくつだ」

渡辺「47」

父「俺が47の時は、どんな父親だった？」

渡辺「多分、今の俺とよく似ていると思うよ」

父「そうか……。：：」

電車が通る音。

渡辺「父さんの一生って何だった」

父「最後でやっと係長だったからな。たいした一生じゃない。だが、お前達を育てた。それでいいじゃないか」

渡辺「俺は父さんの一生を聞いているんだよ」

酒場の喧噪。

父「おあいそ」

店員「あいよ、お疲れさま。760円」

渡辺「鳥瞰図って分かる」

父「町内の地図みたいなものだろう」

渡辺「うん。鳥の目で上から見下ろしたように書かれた地図。それが世の中でさあ。そこに細かいピンで止められている小さな虫。それが俺だよ。いつ外れるか分からない」

父「帰ろう」

渡辺（語り）「父の手がぼんと背中を叩いた」

酒場の喧噪が遠ざかる。

渡辺（語り）「身体が触れ合ったのはいつ以来だろう。窓に映っている私の顔は父そっくりだ」

○書斎（日替わり）

ドアをノックする音。書斎のドアが開く。

久美子「片山さん」

渡辺「片山……」

電話。

片山「おはようございます」

渡辺「やあ」

片山「どうされたんですか。奥さんも心配なさってるし」

渡辺「……」

片山「ご病気じゃないかとみんな心配しています」

渡辺「大丈夫」

片山「とにかく、明日、お宅に伺います」

渡辺「来ることはないよ。僕の代わりは君がやればいい」

片山「……」

渡辺「チャンスじゃないか」

片山「……。とにかく行きます。土曜日ですから、暇なんですよ」

渡辺「来なくていい、僕のことなんか心配しなくていいよ」

電話の切る音

渡辺「土曜日、彼は来なかった。僕の不在が、彼にとって都合のいいことに気づいたのだろうか」

○居間・昼・芥子粒ほどの虫

テーブルを片づける音。

久美子「明日は会社へ行くでしょ」

渡辺「……」

久美子「どうしたの」

渡辺「見ろよ」

久美子「なに？」

渡辺（語り）「目の前の磨かれた食卓の上に小さななにかが落ちてきた。交尾した芥子粒程の虫だった。私は光る羽をもった虫の交尾を食卓に顎をのせて見ていた。初めて見る最も小さな行為だった。この行為は生につながっていく、そして、同時に死にも。生と死が視界の中の小さな光景と重なる。行為の背後にも無数の生と死がある」

久美子「いやね」

渡辺「どうして」

久美子「だって……」

渡辺（語り）「自分は確かに何かのコピーなのだ」

○書斎・闖入者

呼び鈴を何度も押す音

男「渡辺さん、渡辺さん」

女「いらっしやるんでしょ」

男「いるのは分かっているんだから、開けて下さい。

開けなさい」

女「窓が開くよ」

男「仕方ないここから入ろう」

窓を開けて入ってくる。

渡辺「止める」

女「いるじゃない」

男「宮本クリニツクのものです」

女「さあ、車に乗って」

男「みんな話せばすっきりするさ」

渡辺「妻が頼んだのか」

女「ちがう。あなたが頼んだのよ」

男「美人だろ先生」

女「何言ってるのよ」

男「俺も治してもらったんだ。さあ、行こう」

渡辺「止める」

男「抵抗するよこいつ。自分の立場が何にも分かってないんだ。職のない人も多いうのにさ」

女「押さえて」

渡辺「止める」

女「止めるしか言えないのあなた。少し眠ってもらうだけよ」

男「馬乗りになるなんて、先生、刺激的だよ」

女「煩いね、あんたも眠らせてあげようか」

男「そりゃごめん。眠っている間に身ぐるみはがされて、いや、こいつの……」

男の声と、女の小さな笑い声が遠ざかる。

渡辺（語り）「気がつくのと、床に身を縮めて横たわっていた。彼らが入ってきた窓には、少しずつ暮れていく、いつもの空があった。何が入って来て、何が出て行ったのだろうか」

○書斎・麻衣子↓女↓妻（何もないじゃない）

子供の笑い声が遠くで聞こえる。次に子供の声が明瞭になる。

麻衣子「あいこでしょ」

女の子「グー、チョキ、パー」

麻衣子「勝ったあ」

女の子「もう一回」

麻衣子「グー、チョキ、パーグツチョパ」

女の子「あいこでしょ」

渡辺（語り）「麻衣子が女の子と向かい合って足を

開いたり、閉じたりしながら遊んでいる。まだ日は高い。自転車に乗った若い女性が窓を横切る。髪が春の風になびいていた」

麻衣子の声だけが小さく聞こえてくる。

麻衣子「グー、チョキ、パー、あいこでしょ」

渡辺（語り）「いつのまにか麻衣子は一人で遊んでいる」

麻衣子の声が消え。女が小さく歌う声が聞こえてくる。

女「ねんねこしやつしやりませ

寝た子のかわいさ

おきて泣く子の

ねんころろ 面にくさ

ねんころろ ねんころろ

渡辺「誰？」

女「あたし」

渡辺「知らない」

女「知らないって、冗談ばかり。膝枕、気持ちいいでしょ」

渡辺「うん。長い髪だね」

女「長い髪はきらい？」

渡辺「いいや、好きだよ」

女「さわっていいのよ」

渡辺「濡れているね」

女「夜露に濡れたの」

渡辺「何処から来たの？」

女「何処って……。私は、あなたの中にいるおんな

よ」

渡辺「おんな」

女「だから甘えていいのよ。」

ねんねこしやつしやりませ

寝た子のかわいさ

おきて泣く子の

ねんころろ 面にくさ

ねんころろ ねんころろ

渡辺「ねんころろん ねんころろん」
女「ねんねこさつしやりませ

今日は二十五日さ

明日はこの子のねんころろん
宮参り ねんころろん ねんころろん

女の歌声が消える。

渡辺「何故生きなければならぬのか。女に尋ねて
みた。不意に涙が一筋流れた。女は何も答えな
かった。涙のあとを細い指で優しく撫でた。(間)。
女が消えた窓には深い闇が落ちていた。女の長い
黒髪のような、窓に伸ばした手を溶かすような
：。深い闇が落ちていた」

ドアの開く音。

久美子「眠っているの」

渡辺「いいや」

久美子「いい？」

渡辺「：：：」

カーテンを引く音。

渡辺(語り)「久美子は、カーテンを閉め、ガウン
を脱ぎ、私のそばに滑り込んできた。ガウンの下
には何もつけていなかった」

久美子「誰と話してたの？」

渡辺「誰と：：：」

久美子「女の人の？」

渡辺「いや、父さんだよ」

久美子「お義父さん：：：」

渡辺(語り)「この時間には鳥が飛ぶ。ゆっくり、
窓を横切る」

久美子「ここで何をしているの？」

渡辺「窓を見ている」

久美子「窓？ 窓の外に何が見えるの」

渡辺「何って：：：」

久美子「もう、いいかげんにして」

立ち上がる音。カーテンを引く音。

久美子「（叫ぶ）何もないじゃない」

渡辺（語り）「薄暗がりの中で白い身体が浮かんだ。久美子は窓に映った自分の裸に驚き、胸を隠した。その時、白い鳥が、久美子の身体をかすめるように飛んだ。一瞬の夢のように……」

○書齋（日替わり）・1ヶ月経過・5月初旬

玄関の戸を開ける音。

麻衣子「お父さん行ってきます」

渡辺（語り）「娘が学校へ行く。その後、妻が出掛ける気配がする。家のローンだけでも払うためと言って、働きに出た。通り過ぎる時、必ず後ろ髪を引かれるように窓を振り返る。居間に行き、用意してある朝飯を食べる。新聞は読まない。テレビも見ない。排便を済ませ、部屋に戻る。生きるための最低限の用を、後に続く無駄な時間の為に出来るだけ節約する」

書齋の戸を開ける音。

渡辺（語り）「窓を眺めている間に、窓の外の私を次々と失っていった。上司は一度だけ、電話にでるように妻に言ったが、それだけだった。解雇通知は、その後すぐに送られてきた。同僚からも電話一つかかってこない。こうして会社の中の私は失われた」

渡辺（語り）「駅へ急ぐ人の中にも私はいない。ただ、彼らの後ろ姿を窓から、眺めているだけだ」

渡辺（語り）「何時もいる筈の電車の中の不在」

渡辺（語り）「駅の雑踏の中の不在。誰も気づかない、誰も知らない私の不在」

渡辺（語り）「（遠くで雷鳴）灰色の空に稲妻が走った。次々に稲妻は空を切り裂く。激しく雲が動く。（激しい雷鳴）叩きつけるような雨が、窓を打つ。（雨の音が止む）。やがて空は怒りをおさめた。煙るような雨が降っている。五月の空は水滴を含んでいる。会社へ行かなくなつて1ヶ月経った」

○居間（娘との夕食）

居間。

電子レンジの音。

渡辺（語り）「娘と夕食をとる。火を使うことを禁じられていた娘に出来ることは、皿にラップを巻いて、電子レンジでおかずを温めるぐらいのことだ。それでも、いじらしいほどに一生懸命、私の世話をする。娘を眺めながら、この中にも自分がちりばめられていくのと思う。次から次へと、自分は何処まで続いて行くのだろうか？」

渡辺「マイ、気をつけて」

麻衣子「はあーい。よいしょと」

渡辺（語り）「自分の身体にも無数の他者が生きている。顎の下の小さなほくろ。これは誰のものなのだろう」

麻衣子「いただきます」

渡辺「いただきます」

麻衣子「おいしい？」

渡辺「おいしいよ。マイ、塾はどうだ？」

麻衣子「止めたの。嫌いだから」

渡辺（語り）「マイが爪をかんでいる。何年も前に

おさまっていたはずの癖が」

渡辺「（答める調子で）マイ」

麻衣子「（驚いて）えっ」

渡辺「いや、なんでも」

麻衣子「（弾んで）テレビゲームしていい」

渡辺「いいよ」

テレビゲームの音。

麻衣子「よし、よし、やったあー。お父さんもやる。」

渡辺「お父さんはいいよ。マイが上手だから見ているよ」

麻衣子「一緒にやろうよパパ、かんたんかんたん、Aボタンで逃げて、Bで攻撃。パパ、Aボタン」

ゲームオーバーの音。親子の笑い声が、小さくなくなり消える。

○書斎・外套

電車が高架を渡っていく。

父「結局48年間役所に勤めた」

渡辺「永年勤続表彰三回」

父「特に趣味もなかった。色々やったけど長続きしない」

渡辺「釣りなんかやってたじゃない」

父「一年ほどさ。釣り竿持って、川ん中で、俺は何のためにこんな事をやってるんだと思ってしまっ」

渡辺「結局は仕事？」

父「それだけさ。失敗もなかったが、出世もしない。お前、ゴージャリの外套という小説を知っているか」

渡辺「知らない。小説なんて読まないから」

ビールをつぐ音。

父「わしもそうだが、あの本だけは何度も読んだ。あれはねえ、俺のことを書いた本なんだ。主人公はロシアの小役人。公文書の清書という人から見たらつまらない仕事を熱愛し誇りを持っている」

電車が高架を通る音。

父「今日はもう一杯もらうよ」

店員「同じので」

父「ああ、それと息子にも同じの。彼にとって外套を新調することは、そうだなあ、今のサラリーマンが家を建てるようなものかなあ。それ以上かもしれない。そんな思いの外套を盗まれてしまう。それが原因で死ぬ」

渡辺「盗まれる、死ぬ。^{おおごと}大事だね」

父「物語はそれで終わりじゃない。夜な夜な、役人の姿をした幽霊が現れて、盗まれた外套を探し始める」

店員「はいよ、中瓶一本」

電車が高架を通る音。

父「ただ俺は、アカーキイ・アカーキエヴィチのよ
うに外套を新調することはなかった。だから、外套を盗まれることもなかった」

渡辺「アカーキイ・アカーキエヴィチ。長い名前を
良く覚えたね」

父「親をからかうな」

笑い声がふっと消える。

書齋のドアーごしの会話。

久美子（外）「あなた、お父さんの法事」

渡辺（内）「行かない。同じことを何度も言った」

久美子（外）「一緒に法事に行って、お願い。そこ
から出なきゃ、あなたも私もマイも駄目になる
わ」

渡辺（内）「お前とマイで行ってくれ」

久美子のすすり泣く声。

久美子「お願い」

○渡辺の実家・法事

離れて、法事のざわめき。読経。

渡辺（語り）「窓の中の父はいつも機嫌がよかったのに。写真に閉じこめられた父は、少し不機嫌な顔をしている」

洗い物をする音。

母「孝、元気そうじゃない」

久美子「ええ、お母さんこちらはやりますから」

母「それじゃお願いして」

法事のざわめき

母「もう、6年、早いもんね」

姉「お父さん、71才か、少し早かったかなあ。寂しいだろうな、お母さん」

母「そりや何年経ってもね。麻衣ちゃんおばあちやんとこへおいで」

兄「（少し離れて）お前なんか、親父のこと何にも知らないじゃないか。どうして親父がかわいそうなんだよ」

渡辺「そんなこと、言っていないよ」

兄「そう言ったじゃないか」

渡辺「弟だからって、いつも我慢してきたんだ。それに、俺、何も言っていない」

兄「何も言っていない。さっき、俺ばかり割をくっているって言ったじゃないか。我慢してきたあ、親もみずに、家を出て気楽にやっってるのは何処の誰だ」

食器が倒れてかち合う音。

母「止めなさい、父さんの前だよ」

○ 駅・帰路

駅の雑踏。電車が入る音。ドアが開く音。

渡辺（語り）「麻衣子が眠ってしまった。眠ったマイは私の腕の中で急に重くなった」

電車に乗り込む音。

○車内・帰路

久美子「どうして義兄さんともめたの」

渡辺「癖」

久美子「癖？」

渡辺「父さんの癖。父さんは人に会うと、人差し指と中指を立てて、ヨツと言う癖があった」

久美子「私、知らない」

渡辺「兄貴も知らないって言った。それどころか嘘だって言った。俺はお前よりずっと長く親父と住んでいるんだって。それから話がおかしな方に：。そうか、お袋に訊けばよかった」

久美子「もし、お母さんも知らないって言ったら」

渡辺「：。お袋も知らないって」

久美子「お母さんは何も言わなかったわ。お母さん、台所で目頭を押さえた」

渡辺「久しぶりにあった兄弟なのに喧嘩になっちゃまったからなあ」

久美子「違うと思う」

渡辺「違う？」

久美子「お義父さんの癖なんてもう確かめようがないのよ。そんな話がお義母さんには悲しかったのよ。きつと」

電車が止まる音。人が立ち上がる音。

久美子「座る？」

渡辺「いいよ、君が座れば」

久美子「マイをもらうわ」

渡辺（語り）「二人から離れて、扉に肩を預けた。窓の外に父がいた。流れる闇の中に、ぼんやりと背中が浮かび上がった。いつもの立ち飲みのカウンターに肘をつけて：。不意に私の方を振り返り、ヨオという風に人差し指と中指を立てて、サインを送ってきた」

車内。急に電車が止まる。人がざわめく気配。

渡辺（語り）「突然冷たい風が吹き込んできたように窓に浮かんでいた車内の様子が変わった」

電車が動き出す。

渡辺（語り）「久美子も麻衣子もいない。電車は何事もなかったように動き出した。誰一人知らない他人の中に、扉に肩を預けた私がいる。通過していく夜の景色を眺めている。窓の中で私に覆い被さるようして、吊革を持った男の顔が、不意に見覚えのある顔に変わった。驚いて周りを見渡すと、小学校6年A組の同級生達が、吊革を持って、電車で揺られていた」

渡辺「和田か？」

和田「渡辺……。お前、どうして、こんな処にいるんだ」

渡辺「三十年近く通っているんだよ、この電車でお前達こそ、どうしたんだ。みんないるのか」

和田「いるよ、みんな。（間）途中で降りたやつもいるがね。ほら、山田なんか吊革を持つ手が消えているだろ。バブルの時調子にのりすぎてさ、そのついで、首をくくったんだ」

市川「そうだよ、夢なんか見るからだ。小さくても確かな生活が大事なんだ。どうせ人生なんて、一方通行の電車に乗っているようなものさ。行き着いた駅で、みんな、ふっと消えるんだ」

渡辺「市川か……」
市川「人のことを言えた柄じゃないか俺も。優等生なんて、井の中の蛙そのものさ。小学校の先生が行き止まり、その先は何にもない。そういえば、渡辺は卒業アルバムに希望って書いてたなあ。教えてくれよその中身。今なら言えるだろう」

渡辺「忘れたよ」

市川「嘘だ。教えろよ」
和田「止めるよ、市川、久しぶりに会ったんじゃないか」

市川「……」

渡辺「優先座席で眠っているのは岡田先生か？」
和田「保険の勧誘に、教え子の所を回っているんだ」

市川「って。今日も誰も入らなかつたってさ」
市川「お前、入ってやれよ」
渡辺「2つも入っているんだ」

窓を叩く音。

渡辺（語り）「藤波……。丸坊主の、少し斜視の子
供が窓の外から私を見ている」

和田「誰？俺、知らないよ」

市川「俺も知らない」

渡辺「藤波だよ」

市川「そうだ。大人しい奴だったから、忘れてた」
和田「けどあいつ五年生の時、交通事故で……」

窓を叩く音。

藤波「よお」

渡辺「藤波か」

藤波「こつちへおいでよ」

窓を開ける音。風の音

藤波「大丈夫だよ、飛ぶんだ」

渡辺「無理だよ」

藤波「大丈夫。僕にも出来たんだから、勇気を出して」

風の音。

渡辺「行くよおお」

風の音が止む。

○藤波の家

渡辺（語り）「窓の闇の向こうに、懐かしい風景が
開けていた。小さな私がそこにいた」

少年時代のイメージ。小さな足音。

藤波「渡辺君、僕の家に来る？」

渡辺（子供）「ああ、いいよ」

藤波「宝物を見せてあげるよ、でも、誰にも言っちゃだめだよ。昼間は家の人は誰もいないんだ。粉末ジュース、買って行くね」

引き戸を開ける音。

駄菓子屋のおばあちゃん「二等は三枚。あんたはスカ。泣いたらだめ。エビせん一枚あげるからな」

藤波「粉末ジュース二つ」

駄菓子屋のおばあちゃん「あいよ」

渡辺（子供）「僕が払うよ」

藤波「いいよ、今日は」

渡辺（子供）「それじゃ僕は、キャラメルを買うよ」

引き戸を閉める音。

渡辺（語り）「藤波は一家四人で6畳一間のアパートに住んでいた。窓際に小さな文机があった。西日が、すり減っていたが、清潔な畳の目にさしていた。彼は、慎重に押入の戸を開けた。そして、大切なものを扱うように、雑誌を何冊か引き出した」

藤波「すごいだろう」

渡辺（子供）「日の丸っていうの」

藤波「そうだよ、殆ど揃っているよ。これを見ろよ、隼だよ。これなら知ってるだろう、零戦。次は大和だ。全長二百六十三m、幅三十八・九m、排水量六万四千トン、十五万馬力、速力二十七ノット、七千二百海里も航海が出来るんだ。主砲は大口径四十六・三、射程距離4万m、40kmだよ、すごいだろう」

渡辺（語り）「畳の上で、丁寧に彼は雑誌をめくった。細くて長い指」

藤波「君はこんなのは嫌い？」

渡辺（子供）「いいや、かっこいいと思うよ」

藤波「そうだろう、ドキドキしない」

渡辺（子供）「そうだね」

藤波 「(はしやいで) ジュースを飲もうか？」
渡辺 (子供) 「キャラメルは」
藤波 「一つもらうね」

遠くで、「傘修繕、こうもり傘修繕の声」が聞こえてくる。

藤波 「俺、劇画も描いてるんだ。誰にも言っちゃだめだよ」

渡辺 (語り) 「細かく丁寧に描かれた劇画。彼の所有するおよそ畳一枚分の空間は、驚くほどに清潔だった。埃一つなかった。細くて長い指と、清潔な彼の場所、それらはやがて紙の中で一本の線になり、きらめく零戦の姿に変化していった」

渡辺 (子供) 「帰るよ」

藤波 「それじゃ、一緒に君んちまで行くよ」

○道路・渡辺の家への

並んで歩く足音。自転車が二人を追い抜いていく。

渡辺 (子供) 「キャラメル、あげるよ」

藤波 「いらない」

渡辺 (子供) 「買い食いしたら、お母さんにしかられるんだ。ちよっと寄っていく？」

藤波 「いやだよ。今日は帰るよ」

渡辺 (子供) 「ちよっとだけだよ。君に見せたいものがあるんだ、俺の宝物。揚羽蝶」

藤波 「揚羽蝶」

渡辺 (子供) 「蛹になった。もうすぐだ」

藤波 「アゲハじゃないかもしれない。揚羽蝶なんて見たことないもん」

渡辺 (子供) 「昆虫博士のター君が言っていたから間違いないよ」

渡辺 (語り) 「少し不安になった。美しいアゲハの姿を夢見て育てていたんだから」

○渡辺の家

階段を上がり、戸を開ける音。

藤波 「大きいね」

渡辺 (子供) 「アゲハに間違いないだろ？」

藤波 「うん」

渡辺 (子供) 「蝶になったらね、空に放してやるんだ」

藤波 「きれいだろうなあ」

渡辺 (子供) 「明日の朝おいでよ、きつと、蝶になっ
っているよ。一緒に空に放してやろう」

藤波 「うん、来るよ。その時、スケッチしていい」

渡辺 (子供) 「いいよ」

○車内

車内。電車の音。

渡辺 (語り) 「和田……。市川……。みんな、いなくな
った。電車は何処を走っているんだろう」

(間)

渡辺 (語り) 「朝、半分の羽が抜けきれずに死んで
いる揚羽蝶を見た時、二人は一瞬言葉を失った。

枯れ葉のような殻から抜け出た羽の美しい模様が、
羽化できなかつた蝶の運命のように思えた」

藤波 「もう少しなのにな」

渡辺 (語り) 「藤波の目に小さな雫のような涙が光
った」

藤波 「大人になるのは、揚羽蝶には命がけなんだ
ね」

音楽。電車の止まる音。

麻衣子 「(遠くで) お父さん、(近くで) お父さ
ん」

渡辺 「(我に返って) マイか」

電車のドアが開く。電車を降りる。

久美子 「疲れた？」

渡辺「大丈夫。マイは眠くない？」
麻衣子「眠くない」

渡辺（語り）「マイが私の手を握った。私たちはどこにでもいる家族のように三人肩を並べて家路に
ついた」

○書齋（日替わり）

一月半経過・5月下旬

渡辺（語り）「法事から2週間過ぎた。相変わらず窓を見る生活が続いている。何日も窓に誰もやっ
て来ない。昼と夜が振り子のように繰り返される。
窓は少しずつ変化している」

玄関の戸が開く音

渡辺（語り）「妻が帰ってきた。今日は随分遅い。
部屋の電気を消す。もう一つの部屋は消え、十数
羽の白い鳥が飛んでいる。次々に闇をよぎるよう
に旋回する」

書齋のドアを開ける。

○渡辺家・居間

渡辺（語り）「水を飲み、居間を通る。電気をつけ
たまま、服も着がえずに、卓袱台に顔を伏せて妻
は寝ていた。化粧を溶かして流れた涙の跡を見た。
飲めない酒をのまされたようだった。不意に自分
さえいなくなればと思つた。そうすれば、きまり
がつくのだ。一区切りつくのだ」

久美子「起きていたの」

渡辺「うん」

久美子「（強く）行かないで、お酒、飲もう」

久美子、立ち上がるうとして、ふらつく。

渡辺「僕がするよ」

冷蔵庫の開ける音。コップを並べ、ビールの栓を抜く。

久美子「（ビールをつぐ音）乾杯」

コップがふれあう。

久美子「何に、乾杯？」

渡辺「さあ、何だろう」

久美子「あなたが手に入れたあなただけの生活に乾杯」

渡辺「僕だけの生活……」

久美子「私には分からないけどそんな感じがするの。母さんは病院へ連れて行きなさいって言うけど、私は、今のあなたが本当のあなたのような気がするの。ビール飲まない。しらふじゃ辛いでしょ」

渡辺、ビールを少し飲む。

久美子「一日中、窓を見ているの？なぜ？」

渡辺「それしかできなくなってしまった。幸せでも、不幸でもない。ただ、窓の中に僕だけの風景がある」

久美子「世間には関心がないわけ」

渡辺「（静かに）僕には関係がない」

久美子「私も、麻衣子もそこにはいないのね。私はいい、麻衣子はどうかなの？」

渡辺「連れていけないよ。そこは僕だけの風景なんだから。誰も入れない」

久美子「そんな窓なら私が壊してあげる」

久美子と渡辺が立ち上がる音。

渡辺「止めてくれ」

久美子「私は14年間、あなたの何を見ていたの」

二人脱力したように座る。渡辺、ゆっくりと立ち上がる。

渡辺（語り）「立ち上がった私の背に久美子は語り

かけた」

久美子「独り言を聞いて。独り言なら聞けるでしょ」

渡辺（語り）「振り向くと、久美子は子供のよう
に膝小僧を抱えて、身体を小さく揺らしていた」

久美子「私の夢は平凡な主婦。友達は、久美子は結婚願望だからって笑ったわ。あなたと初めて言葉を交わしたのは入社試験の日ね。会社への道を訊いた私に、俺、その社員って、屈託なくあなたは言ったわ。それにしてもあの日にはよくあなたと会った。トイレに行ったら会おうし、昼ご飯に行ったらまた会おう、喫茶店、そこにもいた。（笑う）
帰りの電車でも会った」

渡辺（語り）「遠い昔話のように思えた」

久美子「長い間子供が出来なかった。マイが生まれた時、やっと一人前の家族になった気がして嬉しかった。マイの写真ばかりがアルバムの中に増えていく。マイが歩いた、マイが逆上がりが出来た、マイが10m泳げた、マイが……」

渡辺（語り）「久美子は一人一人のマイを探すように語り、ふっと、マイの姿を見失ったように黙った」

（少し長い間）

久美子「あらためて幸せなんて思わなかった。当然のようにあなたに働いて、当たり前のように毎日帰ってきて、一日が平凡に過ぎていく。それがあつけないく崩れてしまう。私の幸せってこんなにもろいものだったの」

ビールをつぐ音。

渡辺「ビールはもうよせよ」

久美子「強くなったのよ私」

コップを置く音。

久美子「ローンもあるし、パートに出ようかなあつて言ったら、あなたは麻衣は友達と上手くいかな

いところが少しあるから、家にいて欲しいって言ったわ。麻衣には沢山お友達がいるのよって、私、笑ったわ。去年の夏、麻衣は水着のまま帰ってきた。服を隠されてね。私は濡れた麻衣の身体をしっかりと抱きしめることが出来た。あの時のあなたは何処へ行ったの」

渡辺（語り）「不意に久美子は私の顔を見上げた」

久美子「どうして、いじめるの」

渡辺「……」

久美子「お願い、戻ってきて、前のように一緒に。

向こうに行かないで。戻ってきて」

渡辺「風邪をひくよ」

久美子「戻れないなら、消えて欲しい（堰を切ったように泣く）。どうしていじめるの」

渡辺「……」

久美子「お酒飲まない？」

渡辺（語り）「膝の間に顔を埋め泣いている妻を見る。もう若くない女。今、妻の肩に手を置くことが出来たなら。（間）。自分さえいなくなれば、一区切りつくのだ」

突然、久美子が書齋に走る。追いかける渡辺。もみ合う二人。

○渡辺家・書齋

久美子「あなたが見ているのはみんな嘘よ」

久美子が窓を割る。吹き込む風の音。遠くで久美子を呼ぶ麻衣子の声。

麻衣子「ママ、ママ」

久美子「マイ、来ちゃダメ」

風の音。止む。間

渡辺（語り）「飛び散ったガラスの破片を拾う。ジ

グソーパズルのピースを集めるように」

寺本「（小さく）渡辺君」

渡辺「誰？」

寺本「渡辺君」
渡辺「誰？ 痛い」
渡辺（語り）「血が一滴ガラスの表面を伝う」
寺本「渡辺君」
渡辺（語り）「ガラスの破片の中に寺本さんが見える。悲しそうな目で私をじっと見ている」
渡辺「寺本さん」
寺本（子供）「渡辺君、これはあなたが私につけた傷」
渡辺（語り）「寺本さんの指からも、真っ赤な血が一滴流れた」
寺本「帰れるよ、今なら」

○寺本さんの家

走る足音。追いかける足音。

母「英子、おトモタチか」
寺本（子供）「うん、渡辺君」
母「仲良う遊んだってや」
渡辺（子供）「はい」
母「めずらしいなあ、英子がトモタチ連れてくるて。それも男の子やて（笑う）」
寺本（子供）「渡辺君、桜公園へ行こう」

二人の足音が遠ざかる。

○公園

風の音。

渡辺（語り）「桜が吹雪のように風に舞った。薄い紅を引いたような花びらだった。舞い上がる桜の花びらの中に寺本さんは立っていた。小首を傾げてまぶしそうに僕を見た」

寺本（子供）「どう、探偵さん」

渡辺（子供）「探偵？」

寺本（子供）「私が朝鮮人かどうか調べに来たんでしょ」

渡辺（子供）「違うよ！」

寺本（子供）「いいの、朝鮮人よ。さっきのがお母さん。白いチマ・チョゴリ、とっても素敵だったでしょ」

渡辺（語り）「私は探偵役をかって出た。優等生で、可愛くて、優しい彼女を傷つけたいという気持ちがあった。寺本さんを苛めたいという残酷な気持ちがあった。心に小さな傷が残っている。小さいが消えることのない傷が。きつと寺本さんの心にも」

風の音が小さくなる。

○渡辺家・書斎・割られた窓

渡辺（語り）「私も寺本さんも、とつても年をとっている。でも、小首を傾げて眩しそうに人を見る癖は少しも変わらない。寺本さんは、白いチマ・チョゴリを着ている。二人以外誰もいない」

寺本「母さんのチマ・チョゴリ、結局は一度も着なかつた。着て欲しかつたらうなあ母さん。渡辺君、国って何。私の生きている場所が、私の国。それでいいでしょ」

渡辺（語り）「寺本さん……。二人の小さな傷が窓の闇に溶けていく」

イムジン河の前奏が入る。

（歌う）

イムジン河水清く　とうとうと流る
水鳥自由に　むらがり飛びかうよ
我が祖国南の地　思いははるか
イムジン河水清く　とうとうと流る」

間奏。

寺本「渡辺君、この歌、知っている？」

渡辺「知っている。好きな歌だよ」

寺本「鳥はいいなあ。自由に飛べるから」

寺本（歌う）「

北の大地から　南の空へ

飛びゆく鳥よ 自由の使者よ
誰が祖国を二つに分けてしまったの
誰が祖国を分けてしまったの

渡辺「俺、あの後、君に手紙を書いた。でもね、出さなかった。長い間持っていたんだけど、いつの間にか紛れてしまった」

寺本「なんて書いたの」

渡辺「殆ど忘れてしまったけれど、ごめんと、それと……」

寺本「それと……」

渡辺（語り）「ひび割れた窓に、指で、好きだと書いた。寺本さんの姿は消え、闇を呑み込んだような窓があった。帰ることの出来ない昔があった」

「イムジン河」が小さく流れ、消える。

○道路

自転車の音。

渡辺（語り）「次の日、ポリ容器を荷台にくくりつけて、私は久しぶりに自転車に乗って外へ出た」

自転車の止まる音。

渡辺「ポリ容器にはいるだけ、ガソリン入れてよ」

店員「レギュラーですか」

渡辺「いや、ハイオクにしてください」

店員「ガス欠ですか」

渡辺「うん、（間）南山寺って、どう行ったらいいの。石楠花で有名な寺んだけど」

店員「北へ真っ直ぐですよ」

渡辺「（明るく）ありがとう」

自転車の音。鳥の声。

渡辺（語り）「15分ほど走ると、白爪草が今が盛り
りに咲いていた」

自転車の止まる音。

渡辺（語り）「ポリ容器を側に置いて、白爪草を見ていた。とうとうここまで来てしまった」

鳥の声。

渡辺（語り）「ポリ容器をつかんだ。そして、ガソリンを被った」

ライターの音。

渡辺「いくらこすっても火がつかない。（狂ったように笑う）油臭い男が出来ただけじゃないか」

渡辺（語り）「笑い疲れて、仰向けに倒れると、小さな鳥が鳴きながら、真っ青な空に吸い込まれていくのが見えた」

鳥の声。

○道路

渡辺「行く当てもなく、陽光の中をひたすら自転車を走らせた。そして、道に迷った。何処をどう走ったのか、知らない住宅団地の中に出てしまった。主婦が子供の手を引いて、見知らぬ油臭い私をじっと見ている」

自転車の音。

渡辺（語り）「窓がある。男が私を見ている。あれは私だ。窓の数だけ、閉じこめられた私の破片が散りばめられている」

車とすれ違う。

渡辺（語り）「家の近くだと思うが……。家の近所から、迷路に落ちる。自分と逸ぐれたような不安を感じる」

走る自転車。走る、走る。車の急ブレーキの音。

渡辺（語り）「そこは国道だった。妻の勤めているスーパーの看板が見えた。」

○スーパー

スーパーの喧噪。

渡辺「自動ドアの向こうに妻がいた。若い女の店員と並んで、狭い箱の中で背を向けてさかんにレジを打っていた」

久美子「ありがとうございます。3569円になります。5000円から頂戴します」

レジの音。

渡辺（語り）「そばを通ったのに妻は気づかない」

スーパーの喧噪。

渡辺（語り）「スーパーの棚は、美しい野菜や果物で溢れていた。私はその中からレモンを一つ手にとった」

カウンターにレモンを置く。

渡辺（語り）「カウンターにレモンを置いた」

久美子「いらつしやいませ……」

渡辺（語り）「妻は私とレモンを等分に眺めた」

久美子「52円……。100円からいただきます。」

（声を潜めて）出かけてきたの」

渡辺「ああ、道に迷っちゃった」

久美子「（小さく笑う）今日は早く帰るわ」

渡辺（語り）「レモンの重みが掌の中にある。」

（間）。明日はなにかが変わるかもしれない」

雨の音。

○渡辺家・書斎

渡辺（語り）「あれからずっと雨が降っている。少しずつ、雨の気配が日々少しずつろくに漂い、季節は梅雨に入ったのだから。雨は私の周りを静かにした。椅子に坐って窓を眺める時間が少なくなってきた。殆ど床に転がっている。もう、夢を見ることもない」

高架を走る電車の音。

○居酒屋

渡辺（語り）「父も、店員も、客も、誰もいなくて。振り返ると、狭い路地に、霧のような雨が降っていた」

雨の音。

渡辺（語り）「今まで、時が過ぎ去って行くとは思ってしたが、限りなく過ぎ去って行くのは自分の方だと気づいた」

雨の音が止む。川の流れる音。

渡辺（語り）「暗闇の中、手摺りもない、幅50cmほどの橋を渡っている。川の向こうに、巨大な桜の木がある。薄い紅を引いたような花びらが闇の中を次々に舞い落ちていく。木の下に小さな女の子の影が見える。マイだろか？ 寺本さんだろうか？。声をかけようとしたら、影はふっと消えた」

川の流れる音が消える。

○窓のない場所

渡辺（語り）「ここは何処だろう？ 自分の体の中にいるような奇妙な感覚が身体を浸している。自分の中に自分がいる。何時からここにいてるのだろう

か。この場所には窓はない。夢と現実の境もない。深い闇が果てしなく続いている。やっと誰も訪れてこない場所に来た」

小さく電話の音がする。

渡辺（語り）「時々電話のベルが鳴る。誰がかけてくるのだろうか？ 数回鳴ると、ふっと、止む」

了

平成十一年四月十六日第十四回創作ラジオドラマ脚本
本コンクール 佳作入選